

14	岡崎	大樹寺小学校	氏名	ながせ 長瀬	たいち 太一
分科会番号		06	分科会名		生活科教育

1 研究テーマ

身近な自然や人との関わりを通して、
目的をもって試行錯誤する子供を育てる生活科の学習
～1年 生活科『あきランドへようこそ！』の実践から～

(1) 主題設定の理由

幼児教育では、幼保連携型認定こども園教育・保育要領などにあるとおり、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が示されており、子供たちは遊びや生活の中で経験を積み重ねて小学校に入学してくる。小学校入学は、子供にとってそれまでの経験が途切れるわけではない。本学級の子供たちも、これまでの生活や遊びの中で培った経験を生かしながら、学校生活を送っている。「なつとともにだち」の単位では、大きなシャボン玉を作るミッションに合わせて、うちわやハンガー、ストローなどの道具を工夫しながら試行錯誤する姿が見られた。2年生に招待してもらった「おもちゃ祭り」では、身近な材料を使ったおもちゃで遊ぶ楽しさに触れ、「自分たちもおもちゃを作りたい」「お店屋さんがやりたい」という思いを抱いた。このように、意欲的に活動に取り組む姿を見せた一方で、友達との関わり方には個人差があり、自分の思いや考えを伝えたり、友達と協力して活動を進めたりすることに難しさを感じている子供も見られた。そこで、本研究では、これまでの生活や遊びの経験を生かしながら、身近な自然や人との関わりを通して、目的をもって試行錯誤する姿をより確かなものにしたいと考え、以下の主題を設定する。

〈目指す児童像〉

身近な自然や人との関わりを通して、
目的をもって試行錯誤する子供

(2) 研究の仮説と手立て

本研究の仮説として下記の2点を設定し、それを検証するための手立てを立てた。

仮説Ⅰ 秋の自然と関わる学習を通して、秋の不思議や素材の特徴に気付けるようにすれば、身近な自然への関心を高め、目的をもって試行錯誤しながら遊びやものづくりに取り組むことができるだろう。

【手立て①】 秋の自然を感じる学びの場の設定

学校周辺には秋の自然物が少なく、季節体験が限られているため、学区内の神社への校外学習や秋テントの設営などを行い、秋の自然物と存分に関われる環境を設定した。子供たちが秋の素材に触れ、遊びや工夫を考えながら活動することで、秋を身近に感じる姿を育てていく。

【手立て②】 見つけ活動

秋の遊びやおもちゃ作りの中で生まれた気付きや課題に着目し、学習課題を「～見つけよう」と設定した。子供が秋の素材の特徴や遊びの工夫、自分や友達の改善点を見つけることで、目的をもって試行錯誤しながら活動に取り組む力を育てていく。

仮説Ⅱ 学級の仲間や身近な人と関わりながら活動する場を設定すれば、子供たちは活動の目的を意識し、友達や他者と協力しながら、よりよい活動を目指して取り組む力を育てることができるだろう。

【手立て③】 ダジャレを用いたワークシートの活用

ダジャレを用いたワークシート（以下、ダジャレカード）を活用し、活動の目的や頑張ったこと、友達の工夫、感謝の気持ちを振り返る場を設定した。振り返りを通して、自分や仲間の行動の工夫に気付くことで、活動の目

的を意識しながら取り組む力を育てていく。

【手立て④】 段階的な関わりの場の設定

学級内では、4人チーム（意図的に編成したグループ）で秋のおもちゃを作り、仲間と相談しながら活動を進める場を設定した。保護者には客として、保育士からは園児の立場や活動の目的を意識できるように参加してもらった。段階的に関わる相手を広げることで、子供は「誰のために」「どう工夫するか」を考えながら、協力してより良い活動を目指して取り組む力を高めていく。

（３） 抽出児童Aの実態と期待する姿

抽出児童A（以下、児童A）は、上学年との交流場面や休み時間の様子を見ると、年上の子に対して自然に声を掛けたり、遊びに加わったりする姿が見られる。また、活動の内容や流れを理解することも早い。一方で、学級内では友達と積極的に関わるよりも一人で遊ぶ様子がよく見られ、自分の思いや考えを友達に伝えたり、協力して活動を進めたりする場面は多く見られなかった。本研究を通して、児童Aが活動の目的を意識しながら仲間と関わり、自分の考えを伝えたり、友達の考えを受け止めたりしながら協力して取り組む姿を目指したいと考えた。また、園児のためという相手意識をもつ中で、仲間と役割を分担し、関わり合いながら活動をやり遂げようとする姿を期待し、本研究の抽出児童とした。

（４） 単元計画

仮説Ⅰ・Ⅱを踏まえ、本研究の単元計画を（資料１）に示した。

単元課題：「1の1あきランドをひらこう！」				単元計画（資料1）	
	時数	学習課題	主な学習内容	手立て	
ひあい（一）	○秋と友達になろう（秋との関わり）				
	1	秋を見つけよう①	・「秋といえば」の言葉を連想 →校内にある秋の素材を集める	①②	
	2	秋の遊びを見つけよう	・秋テントから秋見つけ →秋の素材から遊びを考える	①②	
ひあい（二）	○園児と交流しよう（園児との関わり）				
	3	年長さんに学校のことを伝えよう	・園児の頃を想起 →交流する準備をする	④	
	4	保育園と交流会① （保育園Aへ校外学習）	・保育園Aに行き、顔合わせ →小学校のことを紹介し、一緒に遊ぶ		
ふかめる（一）	○どんぐりゴマ大会をひらこう（秋のおもちゃ作り導入）				
	5	秋を見つけよう② （鴨田神社へ校外学習）	・秋を見つけない校外学習 →見つけた秋の素材を拾い集める	①	
	6	どんぐりゴマを作ろう	・どんぐりゴマを作り →もっとこうしたいと考える		
	8	1の1 どんぐりゴマ大会	・学級全員でどんぐりゴマ大会		
ふかめる（二）	○秋のおもちゃ作りをしよう①（わくわくするための試行錯誤）				
	9	何を作るか決めよう	・自分が何のおもちゃを作るかを決定 →チームでどんな遊びのおもちゃか計画する	④	
	10 11 12	作る場所を見つけよう	・おもちゃ作りに必要な作業見つけ →「見つける」「作る」「振り返る」の順に おもちゃを協力して作る	②③④	
	13	自分のおもちゃで遊ぼう	・自分たちのおもちゃで遊ぶ →もっとよくできるところを考える	③④	
	14	友達のおもちゃで遊ぼう	・他チームのおもちゃで遊ぶ →こうするといいかもとアドバイスする	③④	
	15 16	わくわくチェンジできるところを見 つけよう	・前時のアドバイスから改善ポイント見つけ →おもちゃを改善する	②③④	
ふかめる（三）	○秋のおもちゃ作りをしよう（園児のための試行錯誤）				
	17	1の1 あきランドをひらこう（計 画）	・誰に開くのかを決定 →今回の会の名前を考える（あきランド）	④	
	18 19	・保育園と交流会②（保育園B） ・秋を素材を集めよう（七所神社）	・保育園Bに行き、園児の実態把握 ・おもちゃに必要な秋の素材を拾い集める	①④	
	20	自分のおもちゃで遊ぼう	・自分たちのおもちゃで遊ぶ →もっとよくできるところを考える	③④	
	21	友達のおもちゃで遊ぼう	・他チームのおもちゃで遊ぶ →こうするといいかもとアドバイスする	③④	
	22 23 24	わくわくチェンジできるところを見 つけよう	・前時のアドバイスから改善ポイント見つけ →おもちゃを改善する （園児が安全に遊べるための試行錯誤）	②④	
	○秋ランドをひらこう（秋ランド開催）				
ひろげる	25	あきランドプレ開催 《保護者》	・保護者に客役をしてもらって、プレ秋ラン ドを開催	④	
	26	あきランド開催（学年で開催） 《保育園B》	・保育園Bの園児に学年で秋ランドを開催		③④
	27	お店の最終確認をしよう	・秋ランドを経て、お店の最終調整確認 →園児のために必要があれば改善する	④	
	28	あきランド開催（学級で開催） 《保育園A》	・保育園Aの園児に学級で秋ランドを開催		③④
	29	ありがとうをつたえよう （園児と秋へ）	・単元のまとめ →ありがとうカードに手紙を書く	③	

3 研究の実践

(1) であい(一)『秋と友達になろう(秋との関わり)』

『であい(一)』では、秋の学習を進めていく意識付けをした。まず、秋という言葉から連想されることを、Yチャートにまとめて共有した。さらに、校庭を散歩しながら秋を探した。落ち葉を集め終わったところで児童Aから「もっと集めたい」と教師に伝えてきた。この言葉は、児童Aが秋に興味をもった第一歩だと感じた。そこで、中庭に設置した「秋テント」へ行き、校内では手に入らない秋の素材に触れさせた(資料2)【手立て①】。その後、秋の素材を好きなだけ教室に持ち帰り、素材の特徴を生かした遊びを考える活動を行った。学習課題は、「秋の遊びを見つけよう」と示した。子供たちは、どんぐりを並べて栗ボーリングなどアイデアがどんどん出てきていた【手立て②】。児童Aは、さつまいもを手に取り、どんぐりを乗せてごっこ遊びをする姿が見られた。また、さつまいもを机上で回すフリスビー遊びを考えた。大人が思いつかない子供視点の面白い遊びを見つけた児童Aだが、チームに共有することはなく、一人で遊ぶ様子だった(資料3)。



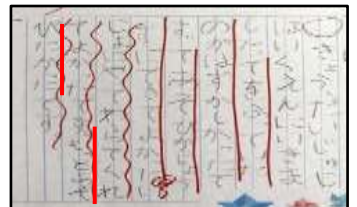
↑秋テントで素材に触れる
子供たち(資料2)



↑秋の素材で遊ぶ児童A
(資料3)

(2) であい(二)『園児と交流しよう(園児との関わり)』

『であい(二)』では、園児との交流会を企画した。保育園に行くことで、園児の様子を実感すると共に、建物や机などの環境の違いから小学生である自分の立場を自覚する機会になると考えた【手立て④】。児童Aは、通っていた園に懐かしさを感じながらも、園児に手を振られた際、照れた様子で視線をそらす姿が見られた。交流後の日記には「もっと遊びたかった」という記述があり、児童Aが園児との関わりを楽しく価値あるものとして捉え、関わり続けたいという思いが分かる(資料4)。園児との交流は、児童Aにとって他者と関わる価値を実感する経験になったと考えられる。



↑児童Aの日記の記述(資料4)

(3) ふかめる(一)『どんぐりゴマ大会をひらこう(秋のおもちゃ作り導入)』

『ふかめる(一)』では、おもちゃ作りの導入としてどんぐりゴマを作ることにした。まず、学区内の鴨田天満宮へ秋の素材集めに出かけた【手立て①】。児童Aは、意欲的に素材集めをしていたが、終始一人で活動しており、友達と一緒に集めたり声を掛け合ったりする場面は見られなかった(資料5)。



↑1人で素材集めする児童A
(資料5)

第2時「秋遊びを見つけよう」の活動中に、「どんぐりゴマ」のアイデアが出た【手立て②】。そこで、みんなが楽しめると思い、どんぐりゴマの活動を考えた。児童Aは、爪楊枝の長さを調節するなど試行錯誤する姿が見られたが、その工夫は一人の中にとどまり、友達との関わりにはつながっていなかった(資料6)。活動の目的や振り返りの視点を明確にし、自分や友達の工夫に目を向けられるような支援の必要性を感じたため、以後の学習ではダジャレカードを取り入れることとした。



↑1人で試行錯誤する児童A
(資料6)

(4) ふかめる(二)『秋のおもちゃ作りをしよう①(わくわくするおもちゃの試行錯誤)』

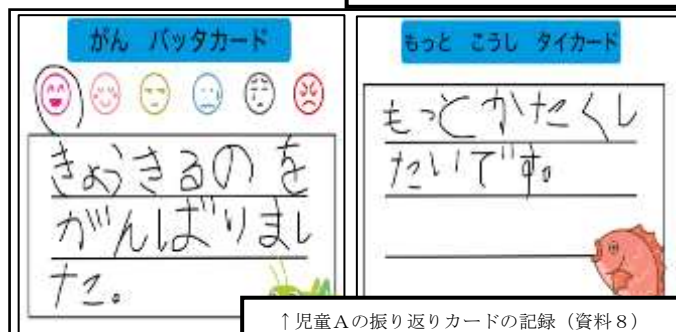
『ふかめる(二)』では、わくわくするおもちゃ作りを目的に活動を展開していく。やりたい遊びが同じ仲間が集まり、チームでの活動を始めた。児童Aは「秋ゴルフ」を選択した。はじめに、今日は何ができるかを見つける活動を行い、目的を明確にした【手立て②】。次に、仲間と関わりながら材料や構造を工夫し、試行錯誤する【手立て④】。最後に、自分の活動を振り返り、次の活動につなげていく【手立て③】。これらの手立てを繰り返しながら活動に取り組んだ。児童Aは、ダジャレカード「チューチューカード(ねずみ)」を用いて、活動の見通しをもたせたところ、カードには「秋ゴルフつくりチュー」と書いた。ゴルフをやるにはクラブが必要であることを見つけ、筒と紙コップでゴルフクラブを作った。ここでは、活動の目的を捉えたうえで制作に取り組もうと

する児童Aの姿が見られた(資料7)。授業終わりの振り返りとしてダジャレカード「がんばったカード(バッタ)」を用いた。児童Aは、この振り返りでつまづくことなく、スムーズに取り組めた。さらに、ダジャレカード「もっとこうしたいカード(鯛)」があることを伝え、児童Aは、「もっと(クラブを)かたくしたい」と自分の考えを整理し、よりよい遊びを目指して目的意識をもって試行錯誤する姿を見せるようになった(資料8)。



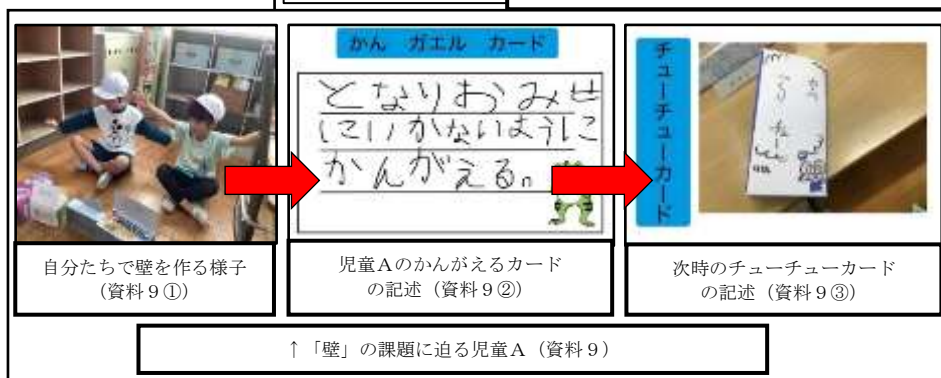
↑目的を捉えて活動する児童A(資料7)

第13時からは、自分で自分のおもちゃを存分に遊ぶ時間と友達に存分に遊んでもらう場を設定した【手立て④】。遊びを通して、まっぼっくりボールが思わぬ方向に飛んでいってしまい、遊びが続かないという問題に気付いた。そこで、児童Aは、自分自身がまっぼっくりボールの行き先を防ぐ「壁」になって対応しようとした。



↑児童Aの振り返りカードの記録(資料8)

すると、その様子を見たチームの仲間も一緒に壁になって遊びを支える姿が見られた(資料9①)。しかし、活動を進める中で児童Aは、「これじゃ、人がいないと遊べないね」と考えるようになり、ダジャレカード「かんがえるカード(蛙)」に「となりのお店にいかないよう



↑「壁」の課題に迫る児童A(資料9)

に考える」と課題をもちだした(資料9②)。そして、次時の活動から、段ボールなどの材料で壁を作る児童Aの試行錯誤が始まっていった(資料9③)。

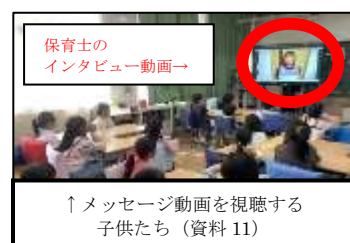
第15時では、「わくわくチェンジできるところを見つけよう」という学習課題を設定し、授業を展開した【手立て②】。前時にみんなで書いたダジャレカード「もっとこうするといいかもカード」を基に教師が意見を絞った「わくわくチェンジカード」から、わくわくするおもちゃを作るために改善できるところを見つける活動をした。カードを手がかりに、おもちゃをよりよくするための試行錯誤に目を向け、自然とチーム内で意見を出し合う姿が見られた(資料10)【手立て④】。児童Aは、決して自分から話始めるわけではないが、C8のボンドを見せる部分から関わりの変化が分かる。特に、友達の意見に対してC20の「ゴルフを？」と壁にゴルフを貼るという冗談を言う姿から、児童Aのチームの仲間に対する関係が、安心できる関係へと変容してい

資料10 チームでの見つけ活動	
児童	発言内容(児童Aの発言は下線部)
T6	わくわくチェンジできるところを、チームで聴き合いましょう。10分間です。どうぞ。
C4・B	話します。あつたときに箱に倒れるのは、ガムテープ貼ればいいんじゃない。
C5・C	床に貼るの？
C全	たしかに。
T6・B	あつ、箱と箱をくっつけばいいんじゃない？
C7・C	じゃあ、ボンド？
C8・A	<u>まって、私持ってるよ。ほら。(ボンドを見せる)</u>
C9・B	いいじゃん。
C10・D	これ、壁にくっつけばいいんじゃない。
C11・A	壁なんてないよ。
T7	なら、作ればいいじゃん。
C12・A	<u>どうやってつくるの？</u>
C全	ああ。
C15・C	ロッカーに並べる？
C16・B	でも、ずれちゃうよ。
C17・A	なら、大きい段ボールで囲えばいいじゃん。
C18・B	ああ、いいね。大きい段ボール最高！
C19・D	じゃあ、それにくっつけばいいか。
C20・A	<u>ゴルフを？</u>
C21・B	なんでやねん。違う、箱をだよ！
C22・C	なら、ガムテープいるんじゃない。
C全	たしかに！
	・・・(急に15秒ほど間があった)

るのではないかと考えられる。その後の振り返りでは、「もっと壁を広くしたい」と記しており、活動の結果を踏まえて改善を考える姿が見られた。児童Aが試行錯誤を継続し、よりよい活動を目指そうとしている意識の高まりが表れている【手立て③】。ここまでの活動で、遊べるおもちゃができあがり、第一段階の完成とした。

(5) ふかめる(三)『秋のおもちゃ作りをしよう①(園児のための試行錯誤)』

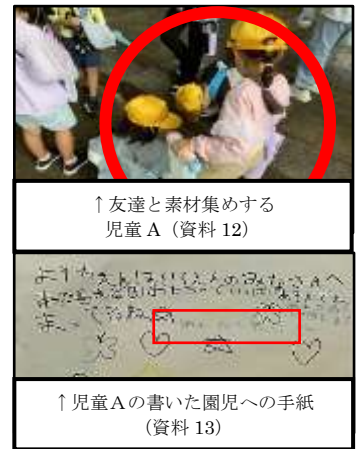
『ふかめる(三)』では、「園児のために」という目的を明確にして活動を深めていく。完成したおもちゃを誰に遊んでほしいかを考えた。選択肢は、2年生、6年生、園児の3つが出た。話し合いの結果、園児との交流が決定した。「園児ともっと交流したい」などの思いが強く伝わってきた。「保育園の先生からメッセージが届いている」と事前に用意していた保育士のインタビュー動画を視聴した(資料11)。



↑メッセージ動画を視聴する子供たち(資料11)

保育士からは、「園児はお店屋さんごっこなどをして遊ぶことが大好き」と園児の実態を教えてくれた。さらに、「園児のために、安全でわくわくする楽しいおもちゃができることを楽しみにしています」とメッセージは続いた。この動画は、これからの活動に園児の立場を意識しながら、おもちゃ作りの目的を明確にし、工夫や改善を重ねていく重要な視点になることは間違いなかった【手立て④】。子供たちは、自分たちが作ったおもちゃをそのまま園児に遊ばせてもいいのかという疑問を呟く声が聞こえてきた。

第 18 時では、おもちゃを改善する前段階として、保育園との交流会を再度行い、園児の遊び方や反応を直接見る機会を設けた。子供たちは、園児の様子を観察しながら関わる中で、「園児にとって遊びやすいおもちゃ」とは何かを気にしていた。【手立て④】。また、園児の視点でおもちゃを改善するために七所神社へ行き、秋の自然物を再度集めた【手立て①】。二回目の素材集めでは、児童Aが友達と一緒に秋の自然物を探す姿が見られ、これまで一人で活動することが多かった姿から変化が見られた（資料 12）。「これ使えるな」などと友達に呟く様子も見られ、素材集めの活動が園児を意識した準備となった。交流後は、園児に向けた手紙を書いた。児童Aは、「みんなで作った秋ゴルフ楽しんでね」と記しており、「みんなで作った」という言葉が、活動を個人のものではなく、仲間と活動する意識への変容と読み取れた（資料 13）。



第 20 時では、完成したおもちゃを園児の立場で遊ぶことにした【手立て④】。実際に遊ぶ中で「危ない」「やりにくい」と感じることを狙いとした。児童Aは、ダジャレカード「かんがえるカード」に「壁が壊れちゃう」と書いた。教師が「壊れるってどういうこと」と聞くと、「年長さんは、力が強かったから多分壊される」と笑いながら答えた。園児の遊び方を想定しながら、安全を意識していることが分かった【手立て③】。

第 22 時では、新たな「わくわくチェンジカード」から、園児のための改善に取り組んだ。児童Aは、わくわくチェンジカードのすべての課題に試行錯誤の方法を見つけ考えることができていた【手立て②】。中でも、「④壁がひくい」の部分が自分でわくわくチェンジできると考え、壁の試行錯誤にこだわって改善することを選んだ（資料 14）。その後、ダジャレカードなどを手がかりに、チームの仲間と共に段ボールで壁を広げたり補強したりする様子が見られた【手立て④】。児童Aは、見所に完成した壁を撮影し、その写真を載せており、園児のために目的をもって工夫したことがよく伝わってきた（資料 15）。



（6）ひろげる『秋ランドをひらこう（秋ランド開催）』

『ひろげる』では、これまでの活動で積み重ねてきた試行錯誤を、他者との関わりの中で生かす段階として位置付けた【手立て④】。まず、保護者を招いたプレ秋ランドを開催した。児童Aは、始めは照れながらも保護者に自分のおもちゃの遊び方を伝えることができた（資料 16）。保護者を客としたプレ開催を行うことで、遊びのルールの伝え方などの経験を積むことができた。

続いて、学年で保育園Bとの交流会を行った。園児が実際におもちゃで遊ぶ姿を見ることで、「思ったより強く遊ぶ」「説明が伝わりにくい」といった気付きが生まれ、子供たちは、誰のための遊びなのかを意識しながら、自分たちのおもちゃを見直すことができた。児童Aは、「もっと遊びたかった」と言ってもらえる秋ランドにしたいという思いをもつようになった（資料 17）。その思いを次の目標にして、ゴルフクラブの量産や補強など、より多くの園児が安心して遊べるような改善に取り組んだ。

最後は、学級で保育園Aに秋ランドを開いた。児童Aは、「園児を呼びこむのを頑張る」と目標を立ててあきランドに取り組み、結果は大盛況だった（資料 18）。振り返りでは、「呼ぶのを頑張りがすぎてめっちゃきた」「渋

滞で棒が売り切れた」と記しており、呼びかけによって多くの園児が集まった様子が読み取れた。また、児童Aは、「まだ遊びたいって言う子がいた。」と期待する園児の姿に喜ぶ様子があった。

秋ランドの活動後、子供たちは秋と園児にダジャレカード「ありがとうカード（蟻）」を書いた。児童Aは、園児への感謝に加え、秋に対して「秋のおかげで保育園のみんなが遊んでくれた」「チームで話すことができた」と、自分たちの活動や関わりを振り返る言葉が見られた（資料19）。秋を単なる自然としてではなく、人との関わりや学びを支える存在として捉え直す姿であり、まさに本単元で育てたい姿といえる【手立て③】。



5 研究の成果と課題

（1）仮説Ⅰに対する手立ての検証

【手立て①】秋の自然を感じる学びの場の設定

校外学習や秋テントの設営を通して、子供は落ち葉やどんぐりなどの素材に触れながら、形や手触り、使い方に目を向ける姿が見られ、秋を身近に感じようとする様子だった。季節体験が限られている環境でも、学びの場を意図的に整えることで秋への関心を高める点では有効な手立てであったといえる。一方で、素材に触れるだけのことがあり、遊びや工夫につながりにくい子供も見られた。今後は問いかけなどを工夫することで、より主体的に試行錯誤する活動へとつなげていきたい。

【手立て②】見つけ活動

学習課題を「～を見つけよう」に設定したことで、素材の特徴や遊びの工夫、自分や友達の改善点を意識し、「次はこうしたい」という目的をもって活動に取り組む姿が見られた。この手立ては、目的意識をもった活動を支える点ではかなり有効であったといえる。一方で、見つけたことを言葉にしたり、次の活動につなげたりすることが難しい子供もいた。今後は、気付きの共有の仕方や振り返りの方法をさらに工夫し、誰でも試行錯誤できる段階にたどり着き、より深い学びへと向かうようにしていきたい。

（2）仮説Ⅱに対する手立ての検証

【手立て③】ダジャレを用いたワークシートの活用

子供が活動の中での自分や友達の工夫、頑張りなどに目を向けて記述する姿が見られた。ダジャレカードは活動を振り返る視点を与え、目的を意識しながらよりよい活動を考えるきっかけとして1年生には有効な手立てであった。一方で、気付きを書くことで終わり、その後の改善行動までつながらない場面があった。今後は、振り返り内容を次の活動にどう生かすかなど、共有する時間を設けるなどして見つけたことを基に活動できるようにする支援の工夫を考えていきたい。

【手立て④】段階的な関わり場の設定

学級内でのチーム活動に加え、保護者や保育士、園児と関わる場を段階的に設定したことで、子供は活動の目的をより明確に意識するようになった。また、保護者を客としたプレ開催や園児との交流を経験する中で、具体的な目標をもって準備に取り組む姿が見られた。関わる相手を段階的に広げたことは、「誰のために」「どう工夫するか」を考えながら共同的に活動に取り組む力を育てる上で必須の手立てであったといえる。

（3）おわりに

本研究では、秋の自然や人との関わりを通して、子供が目的をもって試行錯誤する姿が見られた。特に、仲間と協力する中で関係性が深まっていったことを実感することができた。そして、児童Aの保護者から「娘が休み時間に遊ぶ友達ができたと言っています」と懇談会で感謝の言葉をいただいた。これは、教師の心に響く大変嬉しい出来事であり、授業で子供を育てることを証明することができた貴重な実践となった。今後も、学びと人をつなぐ手立てを考え、どの子供も目的をもって問題に向かっていくことができる生活科の授業づくりに努めたい。